

フライトプラン

2006(平成18)年1月28日鑑賞(梅田ピカデリー)

★★★★



監督＝ロベルト・シュヴェンケ／出演＝ジョディ・フォスター／ショーン・ビーン／ピーター・サースガード／エリカ・クリステンセン／ケイト・ビーハン／マーリーン・ローストン
(ブエナ ビスタ インターナショナル (ジャパン) 配給／2005年アメリカ映画／98分)

……この映画のテーマは、『パニック・ルーム』(02年)に続く母と娘との絆。その舞台は密室だが、メチャ広い超ハイテクのジャンボジェット機内。機長の責任の重さは当然だが、キーパーソンになるのは、9・11テロ以降配置されるようになったエアマーシャル(私服航空保安官)。目が覚めたら傍で眠っていたはずの娘がいなくなっていたうえ、誰もそんな娘は見たことがないと……。そんなバカな！しかし彼女に不利な客観的な事実にはさらにドンドン積み重ねられていくことに……。そんな絶望的な状況の中で発揮される、少しおばさん風(?)になったジョディ・フォスターの母親パワー全開の熱演に拍手！

テーマは『パニック・ルーム』と同じ？

この映画のテーマは、「あなたの妄想だ」と全員から言われ、「ひょっとして……？」と自分でも自分を疑いながら、他方で「そんなはずはない」「娘は必ずこの機内にいる」と信じる母親カイル(ジョディ・フォスター)と娘ジュリア(マーリーン・ローストン)の心の絆。しかし、それって同じジョディ・フォスターが主演した『パニック・ルーム』(02年)と同じでは……？

たしかに、カイルが設計したため、細部までその構造を知り尽くした最新鋭のジャンボジェット機内という舞台設定は、かなりユニーク。しかも、なぜ娘が突然いなくなったのか？それは一体誰が、何のためにやったのか？そういう事情が全くわからないままスリリングに展開させていく手法は、『パニック・ルー

ム』とはかなり違っているし、工夫が凝らされている。しかしそうであっても、この映画がアピールしたいテーマは『パニック・ルーム』と全く同じ。まずは、そのテーマの確認から……。

圧倒的に多勢に無勢……？

この映画は、「これでもか、これでもか」とカイルを追い詰めていく。すなわち、娘と一緒に飛行機に乗ったと主張するカイルに対する反論は次の3段階。すなわち、

①まず最初は、そんな娘は、乗客も乗務員のフィオナ（エリカ・クリステンセン）も見えていないという説明。

②次に、乗務員のステファニー（ケイト・ビーハン）の説明によると、空港に問い合わせた結果、乗客名簿という客観的なデータから明らかになったのは、ジュリアという名前の娘はこの飛行機に乗っていないという事実。

③そして最後に追い打ちをかけたのは、リッチ機長（ショーン・ビーン）から告げられた、娘は父親と一緒に6日前に死亡していることが判明したという「客観的」な事実。

これだけの事実がカイルに突きつけられれば、まさに多勢に無勢……？ さらにそのうえ、夫の死亡によって精神的にまいっているカイルの妄想だと言われれば、「ひょっとして……」と自分自身を疑ってしまうのが普通……？

今誰よりも孤独と闘っている人は？

こんなことを書いている私の頭にフト浮かんだのは、現在、東京の小菅拘置所の3畳一間の独居房の中にいるあの堀江貴文氏（あえて容疑者とは書かない）。アホバカバラエティー番組は、ご丁寧にもこの独居房をテレビ画面上に再現したり、拘置所内での食事メニューを紹介したりして、バラエティー大好きなアホバカ日本人から視聴率を稼ごうとしているが、そんな姿を覗いていると、ホントに世も末だと情けなくなってくる。

それはともかく、あれほどマスメディアから「時代の寵児」ともてはやされた堀江氏が、今独居房の中で痛切に感じているのが、カイルと同じ孤独感だろう。

1月30日（月）までの新聞報道によれば、堀江氏はなお否認を続けているとのことだが、外部との連絡が断たれ、パソコンもケイタイも取り上げられてしまった今、彼は検事から突きつけられる証券取引法違反の被疑事実についてどう対応するか、ギリギリの決断を迫られているはず。元特捜あがりの検事を中心とした優秀な弁護団が、堀江氏との直接の打ち合わせはもちろん、彼と同時に逮捕された宮内亮治、岡本文人、中村長也の3人とどのように連携して事件に対応していくのか、大いに注目したいものだ。

私は堀江氏の逮捕劇は何らかの「国策捜査」であると確信しているとともに、被疑事実とされている証券取引法違反事件は、メディアが手のひらを返したように連日展開している堀江たたきとは全く異質の、複雑で難しい問題を含んでいるものと確信しているが……。

密室劇は面白い！

昔から推理小説で最も面白いのは、「密室殺人事件」と相場が決まっている……？ したがって、推理小説マニアの意見を募れば、推理小説やそれを土台とした映画のベストテン選びはさぞ大変だろう。この映画は殺人事件ではないが、ひょっとして少女の誘拐事件？ あるいはそれ以上の、ジャンボジェット機のハイジャック事件？ そんなスリルと緊張感ある「事件」が、ドイツのベルリン空港からアメリカのニューヨーク空港まで高度1万メートルの上空を飛んでいる、アルト航空E-474最新型ハイテク総2階建て（？）ジャンボジェット機の中で展開されるわけだ。こんな映画については、当然ネタばらしがあってはならないもの。娘のジュリアとともに、窓越しに機内に収納される夫の棺を確認したカイルは、ジュリアに対してやさしく「眠りなさい。目が覚めたらニューヨークよ」と語りかけ、自らも眠ってしまったが、さて目が覚めたら、ジュリアは……？

キーパーソンはエアマーシャル（私服航空保安官）だが……

2001年の9・11テロ以降、配置されるようになったのがエアマーシャル（私服航空保安官）とのこと。したがって、こんな身分の人物が登場する映画は、この『フライトプラン』が最初のはず……。

映画の展開を観る限り、エアマーシャルは機長の判断に従うべき立場のようだが、乗客を装って機内に乗り込んでいるこのエアマーシャルが、法的にどんな身分であり、どこまでの権限を持っているのかは、弁護士の私が観ても実はよくわからない。しかし、この映画にエアマーシャルとして登場するカーソン（ピーター・サースガード）は、一見しっかりしているようだが、その反面何となくうさん臭そうな雰囲気も……？ こんな微妙な役柄を演じるのは、ある意味で役者冥利に尽きるかも……？ さて、あなたはどう感じるだろうか……？

乗務員の数は？ そしてその動きや雰囲気は？

パンフレットに紹介されているE-474機の仕様書(?)によれば、同機の収容可能人数は580名(オールエコノミーで854名)という超大型機。したがって、乗務員の数も相当多いはずだが、なぜかその数は記載されていない。そして映画を観ている限りでは、意外と乗務員の数は少なく、機長、副機長らを除く乗務員の数は、フィオナやステファニーを含む10名程度……？ これは映画のストーリーをシンプルにするため(?)とはいっても、ちょっと少なすぎるのでは？ したがって、注意深く乗務員の動きやその雰囲気を観ていると、何となく怪しげな女性が約1名……？

ジュリア捜しの決断の是非は？

いくらドカイ図体とはいえ、ジェット機の中は密室。したがって、ジュリアが機内に乗り込んでいたならば、彼女は必ず機内にいるはず。そりゃ誰が考えても当たり前。したがって、カイルの要請を受けたりッチ機長は、多少の混乱は覚悟のうえで乗客に対してシートベルトの着用を命じたうえ、ジュリアの捜索を全乗務員に命じた。そして、これはある意味当然の決断。

しかし、もしジュリアが機内に乗り込んだというのがカイルの妄想だとしたら……？ さらに、ジュリアは6日前に既に死亡しているという記録が出てきたとしたら……？ その場合、いくら機内を捜し回ってもジュリアの発見などありえないのだから、ジュリアの捜索の命令は無意味。すると、ジュリア捜しを命じた機長の決断の是非は……？

観客に丸聞こえのヒソヒソ話はちょっと……？

この映画のたった1つの、しかし致命的な(?)失敗は、機内の乗客や乗務員には聞こえないように用心しているものの、観客には丸聞こえとなるスクリーン上におけるヒソヒソ話。そのヒソヒソ話をしているのは、果たして誰と誰……？そしてその内容は……？

このヒソヒソ話によって、それまでのミステリー模様が一瞬にして消えてしまうのは、いかにももったいない限り。もう少し工夫がなかったのだろうか？もっともスクリーンを注視している観客に対して「ヒ・ミ・ツ」がバレた後も、ストーリー展開自体はスリリングで迫力があるため、興味を失うことがないのが救い。むしろ、ポーッとした観客にとっては、悪人が特定された後のほうが、複雑な物語の展開が理解しやすくなるため、かえってベターかも……？

ジョディ・フォスターの熱演は認めるが……？

『告発の行方』(88年)でのミニスカートをはいて奔放に踊る姿や、『羊たちの沈黙』(91年)での知的緊張感に満ちたFBI捜査官の姿に感動している私としては、あまり眉間にシワを寄せたおばさん風のジョディ・フォスターは観たくないのだが、年はみんな平等にとっていくもの。したがって、1962年生まれで、今や43歳となったジョディ・フォスターには、こういう役柄もやむをえないのかも……？

日本人俳優は肌がきれいだから、年をとっても十分観賞に値する美人女優が多いが、白人＝アメリカ人は肌が弱いので、どうしても年をとるとシミやそばかすその他のアラが目立つ人が多い。それはこのジョディ・フォスターも同じで、アップを続けているとどうしてもそういう弱点をさらけ出してしまうことに……。それはアメリカ人自身はあまり感じないのかもしれないが、女性に対して美しいお肌を求める私(?)としては、どうしてもそう感じてしまう……。

もっともそれは、この映画における彼女の熱演とは全く別の視点だから、誤解のないように。この映画における彼女の43歳の熱演は、アカデミー賞最優秀主演女優賞を受賞した『告発の行方』や『羊たちの沈黙』に劣らないものであることは、はっきりと伝えておこう。

2006(平成18)年1月30日記